

米国を解く 26 の鍵

愛知県立内海高等学校
藤井 稔久

アメリカという国家は、我々が授業で扱うには、あまりに巨大で奥深い。胸を張って語る事はネイティブにすら不可能な技である。生のアメリカを求めて素材集めに終始した14日間。そのまとめが、ここにある。ただ、僕らにとってのアメリカ探訪は、まだその途についたばかりである。取材結果と言うには、あまりに稚拙かもしれないが、授業・あるいは総合学習・STなどで利用する教材収集を一段落させ、十分な手応えと共に帰国できたことを何よりも感謝したい。

A wesome; [ə: səm] **かっこいい!**
一昔前なら若者は "Cool!" と叫んだに違いない。想像されるように、本来ジャズで使うスラングだった。それが若者に転用されて流行語と化した。かつて「かっこいい」ことを明示する感嘆詞には、groovy, far-out, killer 等があったが、いずれも廃語、あるいは今では奇妙な響きすらする。それが十年ほど前から "Awesome!" である。町を歩けば、TV をつければ awesome の嵐が吹き荒れる。語源は 'inspire awe' とか 'to be worthy of awe and admiration'。これがすっかり市民権を得た。

だが、言葉のはやり廃りは矢の速さ。セントポール滞在時にお世話になったシルビアの勤務する小学校の生徒は、good の意味で "Tight" とか "That's tight". などと口にする。かつてのスーパースター Michael Jackson も "I'm bad!" と歌いつつ、その意味するところは正反対の "good" であった。世の中知らないことは多すぎる。おじさん世代は、心しないと生徒からそっぽを向かれてしまう。これも勉強・勉強。

B eans to Bonds [bi: nztəbánz] **大豆から債権まで**
シカゴ穀物取引所(CBOT)の八角形のピット。ここは、農業産品フロア。大豆・コーン・小麦などが取り引きされている。商取引開始の合図と共に、カラフルなジャケットを着こなしたトレーダー達が、怒号のような叫びとハンドシグナルで次々と商取引に決着をつけていく。世界の穀物相場を決定していると言っても過言ではない。五大湖を擁し、穀物売買に絶好のロケーションを提供したシカゴ。先物取引という形で、懸案の「需要と供給」の不安定を解決する方法は画期的だった。見出し語は、CBOT のブックレットの表題から。



だが、不思議だ。高度な情報社会を誇る米国が、どうしてコンピュータによる商取引をしないのか。売り手と買い手が面と向かい、旧時代的(!)な喧噪と怒声に身を任せるのは何故か?

実は、電子化の試みは1994年のProject A、2000年のa/c/e platformに引き継がれている。CBOTの取引時間外に、コンピュータを利用したEurex(ドイツ・スイス)とのジョイントが始まった。こうして、アジア・太平洋のタイムゾーンでも商取引が可能になった。だが、トレーダー達が直接顔を合わせる現在の方式こそ、取引を「一瞬」で終わらせる。